

書評

中村 哲著『アフガニスタンの診療所から』筑摩書房

榊 田 絢 子

2001年9月11日、米国で同時多発テロが起こった。未曾有の大事件にこれから何が起るのか世界中が戸惑っていた。ブッシュ大統領は「これは単なるテロを超えた戦争行為だ」として立ち上がり、10月7日から米国の報復攻撃が始まった。しかし多くの方は武力行使に疑念を抱いていたに違いない。今後どうなるのか方向性を求めている時、医療援助 NGO「ペシャワール会」の中村哲医師の意見が10月27日発行の朝日新聞「私の視点」に掲載された。中村医師は1984年からパキスタンのペシャワールで医療活動を始め、以来17年にわたって現地で地道な活動をしており、1989年からアフガニスタンにも活動を延長している。

この本は、1992年6月「アフガニスタン復興のための農村医療計画」の状況把握のため、ペシャワールからカイバル峠を超えてアフガニスタンに入ろうとしている中村医師が遭遇した難民帰還の描写で始まっている。1979年12月のソ連軍によるアフガニスタン侵攻以来、閉鎖されていた国境が苦もなく打ち破られていくのを氏はさすがに思いで見ている。1988年のジュネーブで調印されたアフガン和平協定後も米ソの武器援助は続き、混乱は拡大の一途を辿っていた。国連主導の「難民帰還計画」も多くの国の NGO も手が出なかった。それが今、難民は避難していった時と同じく自力で帰還を遂げている。アフガン戦争は冷戦構造下の米ソ激突の象徴であり、この帰還の動きは米口無能の象徴であると氏は看破している。そして、一つの時代の終焉をまざまざと感じ、「われわれの仕事はこれからだ」と、新たな希望に燃えてカイバル峠を超えて行く。

中村医師が日本から離れた中央アジアに引かれていったのは、偶然に

始まる。1978年6月、地元福岡の山岳会が主催したティリチ・ミール遠征隊に医師として参加したのがきっかけである。この遠征隊で氏はアフガニスタンとパキスタンを隔てる、雄大で美しいヒンズークッシュの山々とはじめて対峙している。「はてしなく連なる巨大な白峰がまず我われを圧倒する。見下ろせば、オアシスの村々もさながら緑の点となり、すべての人の営みが何か小さな、とるに足らぬもののように思われてくる。そこには、あらゆる人口の小細工を超越して君臨する一つの力を感じ取ることが出来る」とその感動を記している。しかし氏を驚かせたのは自然だけでなく、出会う人に請われてしていた診療活動を通して、改めて気づかされた日本でおこなわれている医療の贅沢さと高価さであった。それに対し、進むほどに増えていく患者達に氏が施せたのは、子供だましのような診療のまねごとでしかなかった。村々で歓迎されればなおのことうしろめたさを感じ、「職業人として深い傷になって残っ」といった。その後、氏は何度か現地を訪れ、異質な大地に郷愁を感じるほどに引かれていく。行くたびに、「人はやはり人であるという、当然だがみょうな確信を得てほっと」していた頃、1982年、ペシャワール・ミッション病院の院長が日本に立ち寄り、ある海外協力団体に日本人医師派遣を要請していた。たまたまとった連絡で氏がこの要請に応じることになる。「当地への赴任は最初にヒンズークッシュ山脈を訪れた時のひとつの衝撃の帰結であり、あまりの不平等という不条理に対する復讐でもあった」と同時に、多くの人との出会いを通しての摂理であったと氏は述懐している。

アフガニスタンという国は、同時多発テロ以来、今は毎日、テレビでお目にかかり、地名や、構成民族等、大分身近になってきたが、氏が赴任した当時は日本では国名以外あまり知られていない国であった。氏は分かりやすくアフガニスタンについても説明してくれている。

ペシャワールの地で氏が従事したのは「らい根絶計画」を柱とする主に貧民層の診療である。中でも現地人が出来ないことを補い支えるのが協力であるという信念の下、らい病棟での活動に集中していく。イギリ

ス、ドイツ宣教団や地元州政府との複雑な関わりの中で氏は粘り強く活動していく。この中で、各国の考え方や、病院の半分を占めるアフガニスタンからの患者パシュトゥン人等の特徴に言及している。本音と建前、頑固さや意地、名誉を重んじることでは日本人以上のものである。復讐の精神にも触れている。義理人情も厚く、氏はこの地の人に日本では薄くなった人間性を深く味わい、苦勞しつつ親しんでいく。インド人も、イギリス人も征服できなかったアフガニスタンの長い戦争の歴史にもページが割かれている。彼らの頑強さが戦争では傑出し、命を賭けて闘っていく姿が伺える。しかし、戦争の歴史は、アフガニスタンをますます貧しくしていったことは事実である。氏の活動は、単に医者としてだけでなく、複雑な人間関係の解決や様々な方面に及んでいるが、らい治療とその悪化予防用に特性の靴を製作し、病院に靴工場を設置したことは特筆される。現地での女性の置かれた立場から、女性患者を扱う難しさにも触れ、日本からの女性ワーカーの助けを得ている。

一人の女性患者の率直な叫びが次々と良心の連鎖反応を生み、アフガン人チームを作り、らいの発祥の地とも考えられるアフガニスタンに氏の活動は延長されていく。アフガニスタンには多くの医者があり、その技術も優れているが、その多くが大都会出身者であり、彼らは貧しい母国を捨てて欧米に行く。アフガニスタンの医療事情は「南西アジアの諸国と大同小異で、戦争・貧困＝不衛生＝病気」という強固な繋がりの中にある。そこで氏は、貧しい人々にかかわれる「人材養成」と彼らが出来る「訓練コース」も始めていく。これらの活動は平和であればこそ可能であるが、引き続く民族間の小競り合いの合間を縫って無医村や、必要とする所に活動を延長している。

中村氏の活動を支えている「ベシャワール会」についても紹介されている。国際協力を真に進めていくに当たって、日本に本部を置く会が多く、困難と闘い、善意と工夫で必死にアフガンの地で働く中村氏を応援している。ベシャワールを拠点として命を救うための氏の姿に襟を正される思いがする。

この本は 1993 年に出版されたものであるが、同時多発テロでアフガニスタンが世界の耳目を引く所となり既に 4 刷されている。中村医師らの活動がタリバンも認めるところとなり、やっと上向いてきたアフガニスタンでの援助活動が、今回の米国を始めとする多国の襲撃によって徹底的に破壊されていく様は胸を突かれる思いである。中村氏らが希望を持って始めた 17 年に及ぶ成果を無に帰してはならない。

ペシャワール・メディカル・サービス (PMS) は空爆下のアフガニスタンでも、既に築いてきたルートを通して、難民にもなれない貧しい人々に食料を配給しつづけている。1 月 21 日から東京で行われる「アフガン復興支援国際会議」はどのような叢知を示してくれるであろうか。

氏はこの他にも以下の本を書いて活動を報告している。ぜひどれか一冊でも一読されることをお勧めする。

『ペシャワールにて・癩そしてアフガン難民』(1989 年初版、現在既に 7 刷)

『ダラエ・ヌールへの道・アフガン難民と共に』(1991 年初版、現在 3 刷)

『医は国境を超えて』(1999 年初版、現在 4 刷) これは、第 12 回アジア・太平洋賞・特別賞を受けている。

『医者井戸を掘る』「とにかく生きておれ！病気は後で治す」といって、未曾有の旱魃に立ち向かった記録。(2001 年初版、現在 6 刷) (以上石風社)

『ドクター・サーブ・中村哲の 15 年』(石風社、2001 年初版、現在 2 刷) この本は、中村哲氏を数年に亘って密着取材し、中村医師の軌跡と内面の葛藤を描くノンフィクションである。